

1. 授業の目的・内容

本講義は学科分属の直後、2年次前期に開講している講義である。「特別講義Ⅰ」と称しているように、農業経済学の諸体系・基本的講義（農業政策学や農業経営学、開発経済学、協同組合学、農業市場学など）の縁辺部にあって、それら諸体系・基本的講義の理解を促進する一助となるように、分属学生 の状況を見ながら組み立てているものである。

本年度は、一つに学生の多くが都府県の大都市部の出身者であり、日常普段に本学科の勉学・研究対象である農業や食料関係の様々な事柄に直に接し、考える機会に乏しかったと思われたこと。二つに、従って様々な概念もなかなかイメージ・アップ出来ないのではないかと考えられたこと、そして三つに「農学部」＝自然科学という通念もあってか、社会科学分野としての農業経済学科を選択したことに対する戸惑いを持っているように感じられたこと、などもあって、戸惑いを吹っ切り、農業経済学に興味を持ち、講義等に出てくる様々な概念等も容易にイメージ・アップ出来るようにと、可能な限り現実・実態と接しながら、広く農業経済学の基礎的知識を学ぶという形態で講義を進めた。

2. 授業実行上の取り組み・工夫

講義で特に工夫した点は、一つに農業者や食料・農産物の流通・加工・外食業者、そして農業行政などの担当者を講義に招き、仕事内容や産業実態、農業行政執行上の苦労や楽しさなどを講話して頂き、学生から様々な質問を受けるようにしたことである。最初は遠慮勝ちであった学生も、小生の「誘導的質問」に乗せられてか、次第に活発に質問するようになった。中には講義時間を超え、小生の研究室を占拠し、質問を続ける学生も出たほどである。多分に、農業経済学の概念が一定イメージ・アップ出来、「面白み」の一端は理解されたのではないかと考えている。

二つは、学外での研修を組み込んだことである。その一つは「札幌市卸売市場」、二つはサツラの牛乳工場、三つは農家での研修である。いずれの研修でも、言葉・概念の説明だけではなかなか理解できなかったことが、それなりに実態的に理解出来るようになったのではないかと考えられる。「百聞は一見にしかず」である。

三つは、担当者を招いての講義の際も、学外研修の際も、可能な限り豊富な資料を準備し、また準備して頂いたことである。今、推奨されている視聴覚教育、ビジュアル教育である。その結果、学生の理解がより増し、農業経済学に対する興味もわき、その重要性も了解出来たのではないかと推察される。

出席率が極めて良好であったこと、また、こうした講義のやり方上、時折レポートを課し成績評価をしたが、そのレポートの充実度に、そのことが物語られているように感じられるのである。

3. 若干の反省点

外部から担当者を招いたり、学外研修を組み込んだために、体系的に若干欠けたり、あるいは講義の順序が前後する場合も幾度かあった。今後、更に工夫を凝らすとともに、前後した場合にも学生が混乱しないように、担当者による講義全体の体系的な解説、あるいは事前の説明を更に綿密に行うことなどが必要とされることが考えられる。また、より多くの学生の質問・発言を引き出すための工夫なども求められていると思われる。